

令和2年3月2日

足立区立西新井第二小学校  
校長 吉川 浩司 様

足立区立西新井第二小学校 開かれた学校づくり協議会  
会長 山本 祥一

## 令和 元年度 学校関係者評価書

### 1 自己評価書（学校経営計画・自己評価書）全般について

令和元年度「学校経営計画・自己評価書」及び「学校教育アンケート（児童・保護者）」の結果とともに「開かれた学校づくり協議会」の年間活動を振り返り、学校教育目標の根幹をなす「知・徳・体」の三つの教育視点と、「地域における学校」という側面から考察・評価を行う。

全般を捉えての評価としては、教育課程に則り年間を通して比較的落ち着いた学校運営が行われていた。

学力向上の面では、教職員の約半数が異動による入れ替えになり、学習指導の安定に関して案じられる点があったが、校内研究の実施や外部機関との連携活動などの取り組み姿勢が見られた。しかし、各種学力調査の結果を見る限りは、今後も一層の研鑽姿勢の向上が求められる。心と体の育成については、オリンピック・パラリンピック教育におけるパラスポーツの体験会やクリーン活動の実施、コーディネーショントレーニング地域拠点校としての活動などの取り組みを通して、良い機会作りが行われていると考えられる。

### 2 学校から提示された「課題」や「保護者・地域への期待」について

#### ①「知：確かな学力」

今年度の足立区学力調査では、目標値を超えることができて、通過率70%を下回る教科や学年が多くなった。出題の質が違っていても平均正答率が前年度より大幅に下がっていることは憂慮される。その他、全国学力調査や東京都学力調査においても、平均値に届かない状況を見ても、学習指導に関する期待が高くなる。

学校評価アンケートでは、「授業が分かりやすい」という児童の肯定的な回答が約80%を占めているが、5%の子どもたちが否定的である。この基礎的な力を必要とされる児童が意欲的に取り組み、肯定側の子どもたちも更に向上を目指せるように教職員の奮起が求められる。「開かれた学校づくり協議会」でもその支援は惜しまず、学習への弾みとなる契機の設定として漢字・英語・算数などの各種検定の準会場開催を行っていく。

#### ②「徳：豊かな心」

学校評価アンケートでは、児童の約84%が「学校は楽しい」と肯定的な評価をしている。その反面、7%の児童が否定的な回答を示している、具体的人数に換算すると1学級に2人の割合で学校生活への不満を常に抱えていると思われる。これは少ない数とは言い難く、マイノリティとして見逃さずその原因究明と対応が待たれる。しかし、いじめや人間関係のトラブルに関する対応については、本来なら保護者が行うべき責任範疇についても関わるなど、必要以上の努力をしていることが理解できる。道徳の教科化の中で、現在見失われつつある望ましい人間関係や人権感覚を子どもたちに身に付けさせてもらえるようお願いしたい。

### ③「体：生きる力と健康的な体」

通年の「朝スポーツ」の実施や「運動会」「オリパラ教育」「持久走記録会」などの行事を通して、子どもたちの体力向上や「あきらめない心」の持ち方に対する指導は、比較的良好に行われていたと思われる。

しかし、アンケートにおいて「外遊びが好き」に対する否定的な回答が7%あり、「運動や体を動かすことが好き」ではない児童が8%いるという現実への対応が必要であろう。そのようなことから「運動＝苦しい」という概念を覆す発想の下で展開される「コーディネーショントレーニング」の「地域拠点校」として本年度活動をしたことは、新たな西二小の方向性を示すことができたのではないかと思われる。また、従来から実施されている土曜授業の午後に行う「わくわくセンター」も「子どもたちに遊び場を」というテーマの下で始められたもので、今後も改善を加えながら実施していきたい。

### ④地域・保護者への課題

今回参考にした保護者からの学校教育アンケートについての回収率が50%以下であった現状に保護者の学校教育に対する無関心または依存傾向が感じられる。保護者会への出席率も少ないと聞き、この関わりの薄さの根本原因について考える必要があり、同時にその現状を生じさせている学校の問題点も考えなくてはならない。

今回、回答提出をしてくれた家庭は、学校への見方は異なっても比較的関心を持っている家庭であるため、公平な判断であろうと推測できるが、保護者の全体像として捉えるには懐疑的である。より多くの家庭が学校教育に関心を持ち、関わりを持てるような働きかけや学校の姿勢が重要であると思われる。

学校の姿勢を示す一例として、家庭教育（家庭学習）の現状への取り組みがある。児童アンケートの「宿題以外の家庭学習を行っている」という問いへの肯定的回答は70%弱であった。換言すれば約3割の子どもたちは、家で宿題以外はほとんど勉強をしないということになる。保護者回答でも同様に「子どもの家庭学習に関わっている」への肯定的回答は61%程度で、子どもたちの回答と差異はなく信頼性はあるが、その現状には問題がある。全国学力調査の結果と家庭の姿勢の関連は明解で、保護者が子どもとの関わりを深く持ち、家庭内での会話が多く、文化的体験を共に行い学校行事への参加率が高い保護者の子どもほど良好な学習成果を出している。このことを啓発することも大切であろうと思われる。しかし、家庭環境の責任に転嫁して教職員が自らの使命を逸しないためにも、呼びかけだけでなく具体的な家庭学習例の提示や、その後の点検評価指導などについて計画的・継続的な対応の検討を希望する。

## 3 その他

### ①「開かれた学校づくり協議会」と「コミュニティ・スクール」

本校は以前に「コミュニティ・スクール」の方法をとっていたが、いくつかの条件が縛りのような存在となり、その不都合さから現在の形態に戻したという経緯がある。「開かれた学校づくり協議会」の現状も、参加（出席）状況や活動もあまり芳しくない面もあり、会員の高齢化と世代交代の難しさで推進力に不安があるのも事実である。今後の発展を考える上で若い世代の関わり方が課題と思われる。

### ②「事業等の精選」

学校教育には、時代に即した新しい取り組みが次々と取り入れられているようだが、年間行事だけを見ても現状だけでも、教職員のゆとりが奪われて「働き方改革」とはほど遠いとマスコミ等でも語られている。子どもたちの落ち着いた学習環境づくりや教職員の資質向上のためにも、業務改善が必要と思われる。